

神経難病の 栄養療法 UPDATE

特集にあたって

神経難病，とくに神経変性疾患における栄養障害と栄養療法への関心が急速に高まっている。筋萎縮性側索硬化症(ALS)やパーキンソン病などは発見されてから150年以上の歴史をもつ疾患であるが，それぞれの疾患に特有の栄養障害があり，栄養療法が重要だという認識が高まってきたのはここ10数年ほどである。PubMedで，「疾患名」×「nutrition」で検索すると，ヒットする文献数は2010年以後急速に増加しているのがわかる。

食べて栄養をとるという行動は，人間の生命と健康の維持だけでなく，生活の質を向上させるためには必要不可欠なことである。筆者の講演会における長年の聞き取り調査でも，多くの方が食べる楽しみは人生のすべての楽しみのなかで50～70%を占めると答える。食べるということは，味わうだけでなく，そのときの会話や雰囲気を楽しみ，コミュニケーションのための重要な場であることは言うまでもない。

神経変性疾患の多くは進行性であり，経過中にこの食べる楽しみが奪われ，患者は体重減少や栄養不良を経験する。失った機能は元に戻ることはなく，栄養不良が重症度や生命予後を悪化させることもある。誤嚥性肺炎も生命にかかわる大きな問題である。この避けて通れない問題に対して，私たち医療者は常にエビデンスのある有効な対策は何かを模索していかなければならない。

本特集では，各神経難病の専門家に栄養療法に関する知見と今後の展望についてご執筆いただいた。今後の神経難病の臨床の一助となれば幸いである。

東京都立神経病院 脳神経内科
清水俊夫